
臆病勇者は反逆できない

アルタイトル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

臆病勇者は反逆できない

【Nコード】

N5477X

【作者名】

アルマイル

【あらすじ】

ずっと昔、修が幼かったころに死んでしまった幼馴染。ふとしたきっかけで家を飛び出した修は、彼女にそっくりな少女に出会う。そんな少女を追いかけて行った末に、彼は異世界に勇者として召喚されてしまった。恐ろしい敵と戦いたくはない、でも召喚主に反逆するなんてことは性格的に絶対に無理……。これはとても小市民的な勇者と非常識な化け物が戦うお話。

不定期でしたが、毎週土曜日更新になりました

プロローグ 幻影の少女

重い鉛色の雲が垂れこめている。降りしきる白い霧雨。さながらベールのようにそれは地上を覆っていた。世界は昏く、昼過ぎにしないですでに真夜中のような趣がある。なんともどんよりとして、嫌な日和であった。

そんな灰色の中にぽっかりと浮かぶ、いつそ異様なまでに白い建物。市立昭和記念病院と呼ばれるその無機質な建物の一室で、一人の少女が死に瀕していた。その細く華奢な身体に巻きつけられた布団に、一人の少年がしがみついている。少年の名は式原修。瀕死の少女こと氷雨瀨名の幼馴染だった。

「瀨名ちゃん、死んじゃ嫌だよ！ 嫌だあああ！」

轟く悲鳴。修の小さな喉は裂けんばかりに震えて、悲しさを、薄い胸に渦巻く怒りを伝えようとする。彼は崩れ落ちそうになる身体を生ぬるい布団で支えながら、ひたすらに叫び続けた。

どうして彼女が死ななければならぬんだ！

そんなどこにもぶつけようのない、やるせない思いを心に抱きながら。

そうしてひたすらに叫ぶ修の後ろに、二人の男が立っていた。一人はまだ青年と呼べそうな若々しい男。もう一人は、頭に白いものが混じった紳士然とした男。その二人はいずれも陰鬱な顔を伏せるように下に向け、ぼそりぼそりと声を漏らす。その様子はもうすでに通夜のようだった。

「先生、娘さんはもう……」

「じきに迎えが来るよ。伝手をたどってさまざまに延命治療を施してみたが、もはや限界のようだ」

「先生……」

先生と呼ばれた男、氷雨孝雄はもう何も答えなかった。代わりにギシリと鈍い歯ぎしりの音が聞こえる。若い男はそれだけで孝雄の心中を察して余りあった。彼自身、息子の誕生と同時に妻をなくしていた。お互いに通じ合える何かの間違いなく二人にはある。

そうして二人がひっそりと話を終えた時。それは起きた。運命のいたずら、または神の与えた最後のひとときか。そのどちらなのかはわからぬが、とにかくそれは起きた。

「……つつつ……」

「瀬名ちゃん！」

薄く開かれた瞼、漏れ出した声。大人たちが目を丸くする中、修はあわてて瀬名の枕元へと顔を近づけた。するとその薄い唇がほんのわずかにだが笑みを浮かべる。

「修君……」

「なに、瀬名ちゃん」

「私もう死んじゃうんだ……。自分でもわかるの」

「そ、そんなことないよ！ お医者さんの言う通りにしてれば、ずっと生きられるよ」

「無理だよ。自分のことだもん、自分が一番よくわかるよ。だから最後に言わせて……」

瀬名の声はもう小さな虫の声ほどにしか聞こえなかった。修は彼女の口元に顔を寄せると、最後の言葉を聞き逃すまいとする。

「……私ね、修君のことが……ずっと好きだった」

突き出された唇が修の頬に当たった。とても温かく心地よかった。その熱い感触に、修はびっくりしたように瀬名の顔を見る。だがその顔はどこがおかしかった。明らかに何かが先ほどまでとは違っていた。

修にはその何かがよくわからなかった。だが、隣で心電図を眺めていた医者が至極無機質な口調で告げた。

「」臨終です」

いやによく響いた死亡宣告。その直後、少年の狂ったような絶叫が病室に響き渡った。

夕暮れに染まりゆく田舎町。広がる田んぼは黄金の波に揺れ、水面が輝く。遠い山の端には朧月が見えて夜は間近だ。まばらな家々の窓には次々と灯りが点つていき、町はその装いを変えていく。

そんな町の真つただ中を、一人の少年が駈け抜けて行つた。修だ。彼は黒曜の瞳を光らせながら、碌に舗装もされていない田舎道をすつ飛んで行く。彼はそのままの勢いで自宅の扉を開けると、大声で叫んだ。

「ただいま！ 父さんは!?!」

「おかえり……」

いつも元気に帰ってくるはずの叔母の声。それが今日は、なんだか元気がなかった。修はとっさに何か嫌なものを感じる。叔母に元気がないのはいつも不幸なことの知らせだった。

「叔母さん、何かあつたの?」

「実はね、お父さん……。お仕事の都合で帰つてこれなくなつたらしいんだ」

修の手からカバンが落ちた。瞳から光が失せる。さらに彼の肩が怒れる獅子のたてがみのように、フルフルと小刻みに震え始めた。

「そんな……なんでだよ！ 今度こそ、今度こそ帰るつて言つたじやないか!」

「お父さんの仕事は忙しいのよ……。わかつてあげて、ね?」

「わかるもんか！ だいたい父さんは、どんな仕事をやってるのか
すら僕には教えてくれないんだ！」

叔母は言葉に詰まった。修の父である光一は、恩師の孝雄とともに七年前に勤めていた大学を辞めて以来、妹の彼女にすら何をしていたのか教えていない。光一の仕事については彼女も心配していることで、それについて突っ込まれると辛かった。ゆえに、普段なら立て板に水の要領で言葉を紡ぎ出す彼女もなかなか言い返すことができない。かろうじて「とにかく、落ち着きなさい……」と弱弱しく言えただけだった。

修はその言葉を軽く聞き流した。彼はくるりと踵を返すと、夢遊病のようにおぼつかない足取りで玄関へと歩いて行く。

「待ちなさい！ どこへ行くつもり！」

「……ちよつと出かけてくる」

修の眼は冷たかった。一瞬、その奥に吸い込まれそうになった叔母は背筋を冷やす。

「出かけるってどこに！？ もう夜になるわよ！」

「ほつといつよ」

「しゅ、修！」

叔母の声など、もはや聞こえなかった。修は薄暗闇の中に飛び出すとひたすらに駆けてゆく。どこへ行こう、などというあてはない。

無我夢中で、足の赴くままただ走るのみだ。頭の中を渦巻く熱情と、身体を沸騰させるようなやり場の無い思い。これらを少しでも冷ますために。

修はそうしてしばらく走り続けた。そして冷静に戻った時には、すでにかかりの時間が過ぎていた。月は山々を越えて遙か空高い場所に昇っている。これほど長い間、何をしていたのか。彼にはほとんど記憶がなかったが、不思議と気は晴れていた。彼はフウと荒れた息を落ちつかせると、家路を歩こうとする。気がつかないうちに、彼は家を遠く離れて町外れの神社まで来てしまっていた。

とぼとぼと家へと歩み始める足。だがそれは数歩も行かないうちに止まった。修の視線が、驚いたように神社の前の巨大な楠に向けられる。彼の頭の中を、不意に映画のように美しい過去の映像が流れた。それは遠い遠い過去の日、まだ小さかった彼が幼馴染の瀬名とこの楠で遊んでいる映像だった。

「何年振りだろう。瀬名が入院する前のことだったっけ……」

修は目を閉じると両手を広げ、楠に抱きつく。木に温度などないはずなのに、楠は母のような暖かさで抱擁に応じた。修は自身の細い腕には到底収まらない逞しい幹に身体をこすり付ける。たまらなく懐かしい匂いがした。もう忘れ去ったと思っていた、春風のような少女の匂いがした。

瀬名、もう一度君に会いたいよ……。

修の目に涙が光る。ぼろり、ぼろり。後から後から溢れる滴は、たちまち地面をぬらしていった。彼は木にすがりつくようにして膝をつく。あのころに戻りたかった。父も孝雄のおじさんも、そして

瀬名も、みんなが幸せにしていたあのころに彼は戻りたかった……。

涙に歪んだ視界を、白い服が横切る。そのシルエットに、修は稲妻に打たれたような衝撃を受けた。あり得ないはずだった。そんな姿をした「少女」はすでに存在してはいけなはずだった。

「もしかして……瀬名なの？　ねえ、君は瀬名なの？」

少女の影は不意に動きを止めた。月光の下、どこか見慣れない制服のような服がはらりと揺れる。だが彼女は修に背を向けると、逃げるようにして森へと走り出した。白い服が、瀬名が、何処とも知れぬ闇の中に消えて行こうとする。

「待つて逃げないで！　もうどこにも行かないで！」

もう二度と逃すものか！　強烈な思いが彼を奮い立たせた。涙を腕で乱暴にぬぐいさり、疲れて鉛のようになった足を精神で動かす。何も無い異境にでも放り出されたかのような絶対的孤独、それを味わいたくない一心で彼は再び走り出した。

枯れ枝を踏み越え、森を突き抜けて少女と修は走る。うっそうと茂る森は暗いけれど空には明るい月があった。今宵は月が満ちるとき、灯りなど持たなくとも田舎暮らしの修には白い少女を視界にとらせることなど容易だ。されどそれは少女とて同じようで、暗闇の間を白い影はすりすりりと抜けていく。修はそれを捕まえようと必死に足に鞭を打つ。二人の追いかっこは何かに取りつかれたかのように際限なく続いていった。

そうしているうちに木々はまばらになってきた。修の視界がどんどんと開けていき、左側に絶壁が現れる。絶壁の先には町があった。

数は少ないけれど家々の灯りが闇に浮かび、星座のような形を描いている。修が一瞬、銀河の中に来たような錯覚を覚えるほどそれは美しく幻想的な風景だった。

崖の端、再び森に入る場所で白い影は止まった。くるりと背中が反転する。月影を思わせる、儂げで整った顔が修の前に現れた。同じだった。成長してだいぶ大人っぽくなっているが、その顔は死んだ瀬名とほとんど同じだった。

「瀬名……。本当に瀬名なんだね……。！！」

「私の名前は確かにセナ……。でも、あなたの言う瀬名とはきつと違うの」

「ど、どういうこと？ それじゃあ君は誰なんだよ」

「私は幻影のようなもの。それにもうすぐこの世界から消えて……」

少女の言葉はそこで途切れた。彼女の足もと、いやあたり一面に巨大な光の魔法陣が現れたのだ。魔法陣は修とセナの足のそれぞれを中心として、際限なく広がっていく。野に、森に、空に。白い光に輝く幾何学模様が幾重にも重なり合いながら、次々と大輪の華を咲かせる。風光明媚な田舎の風景は一転して、奇怪な光のアートと化してしまった。

「まずい！ このままではあなたまで！」

これまでとは違い、必死の形相を見せる少女。彼女はそう叫ぶや否や、あっという間に幾千、幾万もの燐光に分解されてしまった。光は雪のように空へと溶ける。修はそのおぞましい光景を見て、悲

鳴をあげそうになった。だが上げられなかった。彼もまた、光にな
ってしまったのだ。

第一話 悪魔の襲来

「起きて起きて……」

遠い世界から響いてくるような声。夏に揺れる風鈴のように涼やかで、どこか懐かしい。修の意識はそんな声に徐々にサルベージされ、おぼろげながらも覚醒した。

「やっと起きたわね。あなた、起こそうとしたのに全然起きなかったのよ」

「そうなんだ、ごめん」

修はすつと頭を下げた。彼はそのままセナの手を借りながら妙に重い身体を起こすと、あたりを見回す。視界に飛び込んできたのは、どうにも見慣れない街だった。いや、街というより廃墟というべきか。立ち並ぶ超現代的なビルの窓はすべて砕けていて、どこにも明かり一つ付いていない。道路の上には錆にまみれた車のようなものが放置されていて、ところどころ舗装が剥けている。かつては大都会と呼ばれていたのであろうが、現在も人が住んでいるようには到底思えなかった。

「……ねえ、ここは一体どこなの？ あれから何があったのさ」

「私からはほとんど何も言えないわ。だけど、一つだけ言えることがある。ここはあなたの街じゃないってこと」

セナはスウツと指を高く上げた。修の視線も釣られるように上がっていく。すると彼の眼に月が飛び込んできた。赤と青の煌きを放

つ、巨大な二つの真円が。

「つ、月が！」

修は目をこすり、もう一度確かめた。されど月は減らない。十回、二十回……。瞼が赤くなるほど彼は目をこすったが、月は二つのままだった。修の身体から力が抜けて、彼は瓦礫に埋もれるように崩れ落ちる。

「なんなんだよ……。何が起きたんだよ！」

訳がわからなかった。理解が及ばなかった。思考は混沌を描き出して修の頭の中がたちまちかき乱される。意識は深い水におぼれたようになっていき、だんだんと周囲のことが分からなくなる。修の目はうつろになって、刹那のうちに光を失っていった。

パシツと乾いた音が響いた。茫然とする修。その頬には綺麗に紅いもみじができていた。

「しっかりして。今はそれどころじゃないわ」

「そんなこと言われたって！ こんな訳のわからないところに放り出されて、これからどうしたらいいんだよ！」

セナは黙って、修の手を地面に押し付けた。すると、わずかだが揺れが感じられる。しかも、その揺れはだんだんと大きくなっていくようだった。

「地震？」

「違うわ、奴が来る前兆よ。奴の魔力が地面を揺らしているの」

「奴って、一体何のことなのさ」

「悪魔よ」

セナはそういうと修の手を握り、一目散に駆けだした。修はよるめきながらもその背中を追いかける。二人は瓦礫の積もった街の大通りを、一直線に走っていった。

そうしていると、地面の揺れはますますひどくなってきた。やがて走るのでさえ支障が出るようになってくる。だが、修の前を走るセナはその足を止めようとはしない。まるで見えない何かに追いかけられているようだった。しかし揺れはとどまることを知らず、ついにセナは走るのを断念して近くのビルの陰へと潜り込む。修もその後を追ってビル陰に隠れた。その時だった。

『緊急事態宣言発令！ 地上作業員は至急、基地内部へ待避せよ！
繰り返す……』

宵闇を裂く、けたたましいサイレン。それと同時に廃墟だと思われていた街に変化が現れた。あちこちで瓦礫の山がモコモコと盛り上がり、中から黒光りする砲塔のようなものが現れたのだ。街の至る所に巧妙に隠されていたそれらは、一斉に同じ方向へと標準を定める。さらにどこからか巨大な飛行物体が飛んできた。その姿を見た修は、思わず驚きの声を漏らす。

「飛行戦艦……！」

空に浮かぶ、途方もなく巨大な白銀の船体。いつか空想科学の本

で見た宇宙戦艦のようなそれは、重力の鎖から解放されたように滑らかに飛んでいく。だがその優美な船体の下部には砲塔のようなものが無数に据え付けられていて、それが戦うための船であることを如実に物語っている。

飛行戦艦は修たちのやや後方に停止した。その輝く装甲の隙間から、次々と落下傘部隊よろしく人が飛び出してくる。しかし、その人間たちは地上へ降りることなく、背中に据え付けられた機械で器用に空中に静止した。まるで何かを待ちかまえているようだった。修にはもはや、何が何だかよくわからない。一体この奇妙な街は何なのか。彼らはいったい何者で、何を待ちうけているというのだろうか……。

「本気で悪魔と一戦交えるつもりなの……」

空を見上げたセナの口から、ポロリとそんな言葉が漏れた。悪魔とは何なのか？ 修は先ほどから気になっていたそれを聞こうとする。だがその時、恐るべき化け物が姿を現した。

闇を滑るように進んでくる、卵のような物体。大きさは周囲のビルが模型に見えるほどであろうか。白くのとっぺりとした殻が月影を滑らかに反射し、その中心部には紅の眼が輝く。ぎよろり、ぎよろり。生命を感じさせぬ機械のような眼は、静かに周囲を威圧している。修はその視線を感じた途端、身体を凍てつかせた。彼の奥底に眠る本能が叫ぶ。こいつは危険だ！ と。

「あれが悪魔なのか……」

修のつぶやき。それがなされた瞬間、世界が白に染まった。幾千幾万もの光条が闇に美しい筋を描きながら、宙を引き裂いて悪魔に

殺到する。鼓膜が吹っ飛びそうなほどの轟音が連続。みるみるうちに悪魔の身体が爆炎の中に沈んでいく。無数の光が重なり合って、周囲は目も開けていられないほどの明るさ。さらに衝撃でビルの外壁が崩れ落ちて、ボロボロと小さなコンクリートの欠片が降りそそぐ。修はとっさに近くにいたセナを覆い隠した。少女の温かなぬくもりは、不安に染まっていた彼の心を幾分か慰めた。

破滅的な時は長く感じられたが、それにも終わりが来た。修は身体の上にたまった埃や石ころを払いのけると、すぐさま悪魔の姿を確認する。ビル街はそのほとんどが瓦礫と化していて、身をひそめたままでも悪魔の姿は容易に確認できた。

悪魔は殻を打ち破られ、上半身に当たる部分がきれいさっぱりなくなっていた。修は思わずほっと息をつく。

「やった、奴は死んだみたいだぞ！」

「いえ、死んじやないわ。すぐに復活する」

「えッ」

まさか。冗談半分といった顔で修はゆっくりと悪魔の方に振り返る。すると唐突に、悪魔の姿が揺らいだ。まるでノイズでも走ったかのような。その直後、世界が逆回転を始める。破壊された悪魔の姿に代わって、ほとんど一瞬のうちに元の卵型の悪魔が現れた。手品のようなだった。

「どうなってるんだよ！ な、なんで……」

「悪魔は並行世界同士で存在を共有している。だから、この世界の

そうして修とセナが走りだすと、悪魔がそれに気がついた。声が大きすぎたのだ。光の触手がすぐさま彼らの方に差し向けられ、猛烈な速度で追撃を始める。

逃げろ、逃げろ、逃げろ！。

悲鳴すら上げられないほどに息を切らしながら、修はセナの手を引いて走る。もう触手はすぐそこまで迫ってきていた。捕まれば間違いなく人ではなくなる。さながら修は、死に追いかけているようだった。

三メートル、二メートル、一メートル……。触手と修たちとの距離はもうほとんど残されてはいなかった。修より若干後ろを走るセナの背中が、もう触手の先端に触れてしまいそうである。修はセナの手を抱きかかえるように自らの体へ寄せると、なおも走り続けた。

不意に光の弾が飛来した。弾は触手を吹き飛ばして、小規模な爆発を起こす。その爆音と同時に修たちの耳へ、必死に叫ぶ女性の声が飛び込んできた。

「迎えに来たぞ！ さあ、早く車に乗れ！」

第二話 基地

修とセナは揃って足をとめた。二人はこちらにむかって叫んでいる女の姿をよく確認する。紅の髪と蒼い瞳をした、吊り目がちの目がいかにもきつそうな女だった。加えて闇色の軍服のような服を着ている上に、武器らしき杖のようなものを手に携えていた。修とセナは彼女が何者なのかとても気になったが、迷っている暇など残念ならなかった。また触手が復活したのだ。

「さあ早く！ ライトリールが追ってくるぞ！」

女は近づいてきた修とセナを、有無を言わず止めてあったスポーツカーのような車に乗せた。その後、彼女自身も急いで車に乗り込むとアクセルを一気に踏み込む。エンジンが唸り、弾丸のような勢いで車が走り出した。

修とセナがほっとして体を寄せ合う中、車は軽快に街を疾走した。女がハンドルを切るたびに、けたたましいブレーキ音を響かせながら右へ左へと走っていく。ビルの谷間をすり抜けて、たちまちのうちに白い車体は触手の追撃から脱した。

そうしていると通りのずっと前方に、なにやらトンネルの入口のようなものが見えてきた。道はそこから地下へと潜っている。どうやら地下施設への入口のようだ。女はアクセルを一層踏み込むと、勢いよくその入口へと車を滑り込ませる。直後、金庫扉のような分厚い金属の扉が下された。女はここでようやく後ろを振り返り、修たちの様子を確認した。

「なんとか大丈夫だったな。少々飛ばしたが、大丈夫だったか？」

「ええ、まあ。それよりあなた何者なんですか」

「おつとすまない。申し遅れたが私はライラ・ステイード。対悪魔機関ゲルニカで主任作戦官を務めている。……といっても、君たちにはよくわからんだろう。説明は副長官殿と神子さまからされる予定だから、とりあえずついて来てくれ」

ライラはそういうと車から降りて、おいでおいでをした。修たちもすぐに降りると、彼女のあとについて行く。薄暗いコンクリート製の廊下に、三人のコツコツとまばらな足音が響いて行った。

施設は入り組んで迷路のようになっていた。だが、修はその構造と造りにどこか既視感を覚える。どう考えても初めてきた施設なのに、だ。彼は隣を歩くセナの方へ身体を寄せると、ライラに聞こえないようにそつと耳打ちをした。

「この建物、なんか見覚えがあるんだけど……。セナはここがなんだかわかる？」

「私にもここがどういう所なのかはよくわからないわ。でも、どうして見覚えがあるのかはわかるわよ。おそらく、この施設は地下鉄か何かを改造して作られている」

修は意外そうに目を見開いた。彼はそのまま、先ほどより少し大きな声でセナに尋ねる。

「どうしてわかるの？」

「カーブの造り方とかが、明らかに電車のようなものを通行させる

こと前提に造られているみたいだもの。こうやって人間が通るだけなら、こんな造りにする必要はないはずよ」

確かに、通路のカーブの部分などはかなり緩やかに造られていた。しかしそれだけのことから地下鉄を元に行っているなどと導き出せるものだろうか？ 修はセナの洞察に舌を巻いた。

「へえ、すごい推理力と観察力だ。まあ昔っから、セナはそういうことによく気がついたけどね」

「私はただのセナ。最初から言っているけれど、あなたの言う氷雨瀬名ではないわ」

「……どうして氷雨瀬名だってわかったの？ 僕は瀬名としか言っていない」

セナは思わずあつという顔をした。彼女は慌てたように顔をうつむけにすると、重い声で言う。

「私と氷雨瀬名は他人ではないってことよ。……これ以上は聞かないで」

セナの声は物悲しいものだった。とつさに修は聞いてはいけないうことを聞いたと思い、黙る。二人の間を重苦しい沈黙が覆った。暗い通路の雰囲気により一層暗くなる。

その後、三人は入り組んだ通路をスタスタと歩いて行った。碌に照明すらついていない通路を歩くのは何となく心細かったが、修はただ無言で歩く。だが、そんな通路がとある角を曲がるや否やその趣を変えた。白い照明の灯る、どこか生活感を感じさせるようなも

のとなったのだ。

「ライラさん、これは？」

「中枢区画に入ったんだ。もうすぐ目的地につくぞ」

ライラがそう言ってすぐに、三人は巨大な扉の前へと差しかった。分厚い鉄の塊のようで、ずいぶんと威圧的な扉だ。ライラはその扉のわきにある機械にカードキーを通す。空気が抜けるような音がして、重い扉がゆっくりとスライドした。

「すごい……！」

目の前に広がる大パノラマ。幅五メートルはあるうかという全天候型のビジョンが、外の風景や様々なデータを三次元的に映し出している。そのもとで数え切れないほどの人々がせわしく働いていた。映画館のような奥行きのある空間にはキーボードをたたくカタカタという音と、人々の声が響き、ある種異様な熱気が漂っていた。そのままに秘密基地という雰囲気、修は興奮したようにあたりを見回す。ライラはそんな修の様子に苦笑して、早く来いといわんばかりに彼の手を引いた。

修とセナはライラに、この空間の中でもひとときわ高い位置にある壇の方へと連れて行かれた。そこには二人の人間が立っていた。一人はライラのものと同じ軍服を着崩し、煙草をふかしている飄々とした雰囲気のある男。もう一人は白い清楚なドレスを着たまじめそうな雰囲気のある少女。修たち三人がそんな二人に近づいて行くと、二人はこちらをみてほっつと息をついた。

「ステイード主任作戦官、ただいま戻りました」

「おお、ご苦労さん。そっちの二人が勇者か？」

「はッ、その通りです」

男は値踏みするような目で修たちを一瞥すると、壇から降りてきた。少女の方もそれに続いて降りてくる。修たちの前にやってきた彼らは丁寧な態度で頭を下げた。

「こんにちは、勇者さん。俺はゲルニカ副長官のカイム・フォン・ドレインだ」

「同じく、ゲルニカ次元召喚部専属神子のエリス・ラ・ステイーニアです」

二人の挨拶に、修は戸惑ったような顔をした。その一方で、セナは胡散臭いものでも見るような顔をする。が、彼女はすぐさまその表情をおしこめたように無表情になると、二人に頭を下げた。

「私はセナ。家名に当たるものはないわ。セナって呼び捨てで構わない」

セナはスツと修の方に視線を振った。ぼんやりとあたりを眺めていた修は、それに気づいて慌てて挨拶を始める。

「僕は式原修です。修って呼んでください」

「セナと修君だね？ よろしく」

「あッ、よろしくお願ひします」

カイムの差し出した手を戸惑いながらも握った修。こんな場所でも、こういうマナーは同じようだった。続いて、カイムはセナの方に向かって手を差し出した。だが、セナはそれを握らない。代わりに彼女は鋭い視線をカイムに返す。

「挨拶はいいわ。それより、あなたたちは何者なのかしら？」

「これは手厳しい。ステイドからは何も聞いてないのかい？」

「ええ、ステイドさんは副長官のあなたとそこにいる神子さんから説明があるって言ってたわ」

「おいおい、ステイド、お前は何にも知らせずに二人をここまで引っ張ってきたのか？」

カイムは呆れたような声を出した。ライラの肩がびくつと震える。彼女は頬を紅くすると、恥ずかしげに顔を下に向けた。

「わ、私が説明下手なのは副長官殿とて御存じだろう。それにまずは副長官殿や神子様の説明するのが筋かと思つて、その……」

「確かにお前の説明下手は凄いいもんな。飲み屋への道を説明するのに三十分もかかるやつはお前だけだ」

「余計なことを言わないで下さい！ それより説明を！」

「わかった、では説明しよう」

カイムはごほんとかい払いをした。彼の表情が引き締まって幾分か

真剣なものになる。すぐ隣に立っていたエリスも若干顔をこわばらせた。

「まず、聞いておきたいんだが君たちはさっきから外で大暴れしてる化け物のことを知ってるか？」

「たしか悪魔って言うんですよね。名前ぐらいしか知りませんけど」

修はそつとセナの方を見た。セナはもつとほかに悪魔のことを知っていそうではある。しかし、彼女は何も言わずカイムの話聞くようであった。

「ああ、その通りだ。俺たち人類の天敵で、五百年前にも一度来襲している恐るべき奴らだ。さっきも見ただろう？ 軍隊の連中が壊滅する様を」

「見ました……」

「ならわかるはずだ。連中は軍隊では倒せない。奴らを倒せる存在はこの世界でただ一つ、聖石を身体に埋め込んだ勇者だけだ。だが、残念ながら我々の世界ユーフラテスには勇者はいない。そこで召喚の儀式を執り行い呼び出したのが……君たちというわけだ」

第三話 弱い心

あたりに戦慄が流れる。修の顔は石化したように硬直して、虚ろな視線がカイクに突き刺さる。修の血の気の薄い唇が震えて、かすれた声を紡ぎだす。

「……それって、あなたたちが僕ら二人をこんな場所に呼び出したってこと？ あの化け物を倒すために」

「その通り。悪魔を倒す最後の手段として、我々は君たちを召喚した。異世界からユーフラテスへとな」

修は何となくカイクたちの言っていることが分かった。されど、理解したくない。非現実だと思いたい。ゆえに彼はもう一度カイクに尋ねてみる。

「召喚とか、よくわからないよ……。まさかよくある物語みたいに魔法陣を描いて『勇者様、来てください！』みたいなことでもやったというの？」

「ああ、大体そうだ。詳しいことはこのステイナーニアから聞いてくれ」

カイクは自分の隣にいるエリスの肩をポンポンと叩いた。修とセナの視線が彼女に集中する。彼女は一步前に出てくると、口を押さえてこほんと息をついた。

「おおまかに言いますと、修さんのおっしやった通りで正しいです。私を使用した召喚魔法は、異世界にいる勇者として適当な人物をラ

ンダムで作成した魔法陣の上にお呼びするという魔法でした。今回の場合は予期せぬ次元の乱れがありまして、かなり空間的なずれが生じてしまいましたか……」

エリスは申し訳なさそうに言葉を終わらせた。直後、修の拳がにわかには震え始めた。蒼白だった顔にドンドンと赤みがさしていった。額に血管が浮かび上がって、歯がカタカタと音を立て始める。気持ちに沸騰し、頭の中が怒り一触に染め上げられていく。そして。

「ふざけるな！ そんなの誘拐と一緒にだ！」

修はエリスにつかみかかった。とっさのことで、エリスは何の抵抗もできない。だがそんな修の手を、カイクが払いのけた。

「責任者は俺だ。文句なら俺に言ってくれ」

「わかったよ。じゃあ言うけれど、どうしてこんな誘拐まがいのことをしたんだ！ ひどいじゃないか！」

「我々にはどうしても勇者が必要だったんだ」

「ふざけるな！ そんなのあんたたちの勝手じゃないか！」

「……その通りだ」

カイクは淡白な口調で断言した。その目、表情、身体には一切の揺らぎがない。修の表情がほんの一瞬、あっけにとられたように固まる。だがすぐにその顔は赤みを増した。

「わかってるなら、なんで……！」

「人間、理解と行動は往々にして違うのだよ。……エルトラン、映像を切り替えてくれ」

「了解。メインモニター切り替えます」

カイムの指示を受けたエルトランという女性は、素早く手元のキーボードを弄った。正面にある巨大なディスプレイがフラッシュアウトし、一瞬で画面が切り替わる。するとそこには、地面に向かって触手を打ち込んだ悪魔の姿が映し出された。悪魔は触手を螺旋状に束ねて、地面をドリルよろしく掘り進んでいる。地面と触手の間で散る火花。修はそれを愕然としたように見つめる。

「これは……」

「悪魔は人間の魂を喰うことしか頭にない。だから人間を求めて、この基地まで穴を掘ろうとしているのさ」

「それじゃあ、悪魔がまたここへやってきて僕らを食べるってこと？」

修の声は小さく怖気づいたようであった。無理もない。彼は悪魔に魂を喰われた人間のなれの果てを、鮮明に覚えているのだ。彼の背中を冷たいものが走り抜ける。手足がにわかに震え始めて、戦慄で脳内が満たされた。その一方で、カイムは淡々と話を続けた。

「君たちや俺たちだけじゃない。悪魔は放っておけば世界中の人間を食い荒らす。しかも悪魔はあれ一匹じゃない。五百年前の記録によればまだまだ悪魔は現れる。これがどういう意味かわかるか？」

答えは簡単だった。修はその残酷で絶望的極まる答えを、かみしめるかのようにゆっくりと口にする。

「……この世界の人間は、すべて悪魔に食われるってこと」

「そういうことだ。だから……」

カイムは懐を漁ると黒光りする物を取り出した。その形を見た修は思わず息をのむ。修は実物を見たことはなかったが、彼にもとても見覚えのあるものだった。黒くてL字型、中央付近に蓮根のような穴のあいた膨らみ。さらに持ち手の部分には引き金がついている。それはどこからどう見ても拳銃だった。

「僕たちを脅すつもり？ どこまで汚いんだよ！」

「ふん、そんな小物臭いことはしないさ。ほらよッ！」

ふわり、宙を舞った拳銃。あろうことがカイムは拳銃を投げた。銃は綺麗な放物線を描き、修の手のひらの上に収まる。修はそのずっしりと重い感触に、目を丸くした。

「……どういっつもりなのさ？」

「けじめをつけようってことさ。俺はいまこの組織の責任者だ。だからその銃で、好きなだけ俺を撃て。だが頼む、奴らを止めてくれ。それができるのは君たちしかないんだ」

重苦しい沈黙。集まった五人の間に緊張が走り抜けた。カイムの傍にいたエリスとライラは顔を蒼白にして、額に球のような汗を浮かべる。彼女たちはあわててカイムの前に立ちふさがろうとしたが、

カイムの手がそれを制した。カイムは二人の方へと振り返ると首を横に振る。

一方、修は手にしたもののあまりの重さに手を震わせた。彼はとつさにセナの方へと目配せをするが、彼女は無表情のまま。何も口にはしない。修は一人で考えなければならぬようだった。

…。
僕が、人を撃つ……？ この人は確かに憎い。憎いけれど…

修の心が激しく波打った。憎しみと倫理感とカイムへの同情が激しくぶつかり合って、混沌としたうねりを生み出す。理路整然とした考えなどでてくるはずもなかった。彼は答えが出せず激しく息をするばかりだ。心臓が早鐘を打ち、修の身体が燃えるような熱さを帯びる。

「ほ、本気なのか？」

「ああ、撃つなら撃て」

「どうせ、撃てないとか思ってるんだろ！」

「そんなことはないさ」

カイムの声に揺らぎはなかった。されど、身体がほんのわずかにだが震えている。おそらく彼は本気で、修が撃つと思っているのだ。ゆえにポーカーフェイスを装っても隠しきれない恐怖が、身体を揺らすのだ。修はそんな様子を見て、この男の覚悟を悟った。

ゆっくりと銃口がカイムの頭に狙いを定める。凍えるように震え

る手で、修は銃を構えた。目標との距離はほんの二、三メートル。たとえ手が震えようと撃てば必ず当たる距離だ。

「みんな、あんたたちが悪いんだ……。僕は悪くない……！」

自分に言い聞かせるように、自分に暗示をかけるようにつぶやく修。彼の人差し指が、少しづつ引き金を引いて行く。這うような速度で進む指。だがその指はある程度のところでは止まってしまった。引き金を引く、ほんのわずかな力が出せない。指がなくなってしまうたように感覚がなく、またしびれている。彼は銃を構えたままの姿勢でしばし、硬直してしまった。

沈黙する世界。計器が出す僅かな音と、荒い呼吸音だけが響く。辺りはまるでスローモーション。何もかもがゆっくりと動いているように見えた。

「……………撃てない」

修の手から銃が滑り落ちた。カランと軽い音が響く。それと同時に修も床へと崩れ落ちて、ガタリと膝をついた。

結局、修は銃を撃てなかった。カイクに同情した、撃つほどのことではないと思った。そんなことも修が撃たなかった理由には含まれるだろう。だが撃てなかった最大の原因は修の弱さだった。彼は非情に徹しきれず、人を撃てなかったのだ。

ボロボロと修の目から涙が落ちる。泣き声はしない。ただボロボロと涙が滴る。情けなかった。自分が決めたわけでもないのに、ただ情に流されて撃てなかった自分がどうにも情けなかった。

「それでいい」

後ろから優しげな声がかげられた。修が振り向くと、そこには決意したような顔をしたセナが立っている。彼女はそのまま茫然としているカイムの前に移動すると、淡々とした様子で口を開いた。

「この状態では修は戦えないわ。私が一人で戦うから準備をして。まさか、何の準備もしないまま悪魔と戦わせるわけではないでしょう?」

「……ああ、わかった。ステイド、セナを第一装備室に案内してやってくれ。他のものは急いで出撃態勢を整えろ! 悪魔が来ちまうぞ!」

「了解ッ!」

カイムの号令のもと、にわかにあわただしくなった室内。モニター画面が切り替わり、次々とデータのようなものが映し出されていく。沈黙は打ち破られ、キーを叩く音と人々の声が激しく響いた。そんな中、修の目の前でライラはセナの手を握った。

「さ、早く行くぞ」

「ええ……」

「ちょっと待ってくれ! 僕も戦わせて!」

何も言わずに背中を見せたセナに、修は必死の形相で呼びかけた。するとセナは、その色素の薄い髪を揺らしていやにゆっくりと振り返る。なんともさびしげな笑顔が、修の前に現れた。

「それはできないわ。今のあなたはとても戦える状態ではないもの」

「でも……セナ一人だけで戦わせるなんて僕にはできないよ!」

「大丈夫、私には悪魔に喰わせる魂なんてないから」

「どういうこと? 。それを尋ねる間もなく、セナは出て行ってしまった。その様子はまるで、修から逃げるようだった。その場には一人、茫然とした修だけが取り残される。それはちょうど、瀬名が死んだ時のような状態だった。 。

第四話 勇者出撃

鉛色に輝く廊下を二人の人影が進んでいく。ライラとセナだ。カツカツと硬質な足音を響かせながら、彼女たちは早足で廊下を突き進んでいく。そうしてしばらくの間、迷路のように入り組んだ廊下を歩いて行くと、『第一装備室』と書かれた巨大な扉が現れた。ライラはその扉の前で立ち止まると、わきにあるインターフォンのような装置に呼び掛ける。

「ドクター、ステイードです。勇者を連れてきたので扉を開けてください」

「了解。ちよつと待っておれ」

扉の奥からピッピッという無機質な操作音が響く。直後、モーターの駆動音が響き始めた。厚さ十センチはあろうかという金属の塊が、ゆっくりとだが開き始める。周囲の扉がビリビリと震えて、セナは緊張の色を深めた。すると中から、白衣を着た老人が現れる。髪の毛の色が完全に抜けてしまっていて、顔には深い皺。かなり高齢のようだ。

「やあ、よく来たな」

「お久しぶりです、ドクター」

「うむ。で、そちらの女の子が勇者かな？」

セナはコクツとうなずいた。それに続いてライラも首を縦に振る。老人は得心したように顔をほころばせた。彼はヨタヨタとセナの方

に近づいて行くと、その皺だらけの手を差し出す。

「そうか。私はネロ、ここの技術部の部長を務めて居る。気軽にドクターと呼んでくれ」

「私はセナよ。よろしく」

二人は軽く握手を交わすと、扉の中へと入った。それにライラも続いて行く。三人は、扉の中の薄暗闇へと消えた。

室内は雑多な様相だった。コードや機械が乱雑に置かれていて、注意していないと何かに足を引っ掛けてしまいそうなほど。それに慣れていないセナとライラは手間取りながら室内を進んでいく。すると、彼女たちの目の前に蛍光グリーンの液体で満たされた怪しげな水槽が現れた。大きさは人がすっぽり入って余りあるほどか。その異様な存在感に、二人は思わず目を奪われる。

「これは？」

「聖石を保管しておる水槽だよ。聖石は大気に触れさせておくと膨大なエネルギーを発生させてしまうのでな。だからこうして特殊溶液の中で保存しておる」

「なるほど。で、その聖石というのが私に埋め込まれるのね？」

ネロはふつと不敵な笑みを浮かべた。彼はセナの方に振り向くと、おもむろに口を開く。

「誰から聞いたのかね？」

「副長官が言ってたわ。聖石を埋め込んだ勇者でしか悪魔には対抗できないって」

「なるほど、賢い子だ。だが、聖石を埋め込むといっても君たちの体にじかに埋め込むわけではない。これを見たまえ」

ネロは手近なところにある端末のようなものを弄った。奥の壁が轟音とともに開かれて、中から黒い人影のようなものが現れる。セナが目を凝らすとそれは、人型のロボットのようだった。礫にされたように固定されたそれは、禍々しいフォルムをしている。無数の装甲板やその間をつなぐコードのようなものが組み合わさって、まるで機械の化け物のようだった。

「これは甲一種特殊外骨格といってね。このスーツに付けられた疑似神経回路を通じて君の脳を聖石と間接的に接続する。これにより君の肉体への負荷が抑えられ、聖石を安全に取り扱うことが可能だ」

「そう、じゃあさっそくこれを着けましょう。敵はすぐ近くまで来ているわ」

「まあ待ってくれ。その前に君と相性の良い聖石を見つけねばならん。聖石といっても何種類かあるのだね」

ネロは首からぶら下げていた聴診器のような器具を端末に接続した。そしてセナの頭に反対側を押し付ける。端末のディスプレイに次々とグラフや数値が表示され、ネロはそれを険しい表情で読み取っていた。

「ふむ、あの騎士タイプを扱えるとは……実に興味深い。どれちょっと調査を……」

ネロは目を怪しく光らせると、セナの方へと手を伸ばした。だがその手がセナの方に届く直前、床が大きく揺れた。三人はバランスを崩して倒れかける。すると揺れる三人の耳に、けたたましい警報音が飛び込んできた。

『第七魔力結界崩壊！ 第七魔力結界崩壊！ 繰り返す、第七魔力結界崩壊！』

「まずい、悪魔が来るぞ」

「しかたあるまい、今すぐ出撃準備だ。ステイードくん、指令室と連絡を取りたまえ」

一方、揺れが始まる少し前。指令室では修が無力感にうち震えていた。彼は床の方に顔を伏せたまま、一向に起き上ろうとしない。だがそんな彼の方に、ふつと細い手がかけられた。修の視線が、はたと後ろを向く。するとそこには紅い瞳を心配の色に染めた少女が立っていた。その揺れる蒼髪と真紅の瞳は、エリスだ。

「心配なさらなくとも大丈夫です。セナさんはきつと戻ってきます」

「うるさい、君たちに何がわかるんだよ！ 僕の気持ちの何がわかるって言うんだよ！」

「わかりますよ、今のあなたと私は似ている」

「似てる……？ どこが？」

修はいらだたしげな顔でいった。その眼光は鋭く、頬がひきつっている。だが、エリスは至極穏やかな顔で言葉を返した。

「何もできなかったりとか、そういったところが私たちによく似ているんです」

「……！」

修の頭が悔しさでいっぱいになった。その通りであった。このままでは、彼はここにいる人間たちとなんら変わらない。無力で、何もできない存在だ。修は四肢に力を込めて床から立ち上がる。

セナのところへ行こう

彼はそう決意すると、一步を踏み出そうとした。しかしその時、激しく地面が揺れた。

「うわあッ！」

よろけて尻もちをついてしまう修。目の前の巨大モニターの映像がたちまち切り替わり、悪魔の映像が映し出された。先ほどまでとは違い、真正面からのアップ映像だ。そこに映し出された凄惨極まる悪魔の瞳に、修は生理的嫌悪を催す。

小さな勇気が萎んでいく。修は立てなかった。動けなかった。悲鳴を上げるので精いっぱいだった。

警報が鳴り響く中、震える足をなんとか抑えつけようとする修。彼には戦闘意欲などほとんど残されていない。悪魔というものはそれほどまでに圧倒的な存在であった。土台、ただの学生であった彼に立ち向かえる相手ではなかったのだ。彼の頭はまっさらになり、口からは力なく吐息が漏れる。その時だった。

『副長官、外骨格の適合が完了しました。外骨格、聖石ともにシステムはすべてオールグリーンです。第九出撃孔を使用できるようにしてください』

警告メッセージに彩られていたモニターの画面が再び切り替わり、ネロの姿が映し出された。その後ろでは、彼より一回り大きな口ポットのようなのがカタパルトに乗せられている。その妙に人間的なフォルムを見て、修ははっとした。あれはセナだとわかったのだが、そうして彼が驚いている間にも出撃準備は着々と進められていく。

「よし、第九出撃孔を開口。勇者出撃だ」

「はッ！」

司令室のあわただしさに一層磨きがかかった。職員たちは次々とキーボードを叩き、モニターには次から次へと映像が流れていく。

「第一、第二防護壁オープン！」

「第八魔力結界限定解除！ 第九出撃孔、全システムオールクリア！」

「魔粒子回線接続完了！ 副長官、勇者との回線がつながりました」

「よし。さっそく話をさせてくれ」

「了解！」

カイムの下にいた職員は、早速彼に受話器のような物を手渡した。カイムはそれを手にすると、低い声で告げる。

「いきなりで悪いが、俺たちの運命はこの戦いにすべてがかかっている。悪魔は強大だ。だが、君の体は六十層からなる特殊装甲板とアルカナ結晶体で守られている。だから恐れずに戦えばきっと勝てる」

「もとより勝つつもりです」

「そうか、なら俺も安心だぜ」

カイムは軽い調子でさういって、ヒュウと口笛を吹いた。だがその直後、険しい顔に戻った彼は雷鳴のごとき勢いで叫ぶ。

「勇者、発進ッ！！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5477x/>

臆病勇者は反逆できない

2011年10月23日01時53分発行